エリエル・サーリネンが仲間と住んだ

ヴィトレスク

フィンランド　ヘルシンキ郊外

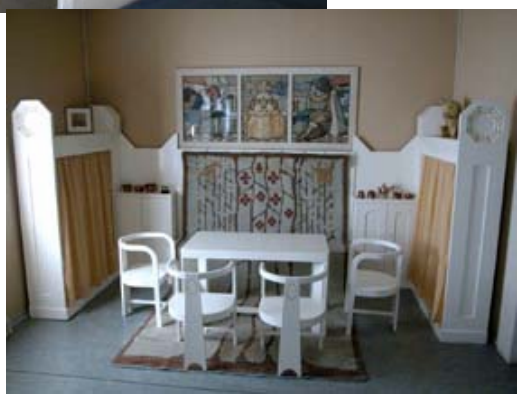
ヴィトレスク　Hvitt　Rask　Hvitt　：スウェーデン語で白
Rask　：スウェーデン語で湖
ヘルシンキ西方の自然の中にあるこの建物は
建築家のエリエル＝サーリネン、アルマス＝リンドグレン、ヘルマン＝ガゼッリウスの三人の共同の設計活動と家族との生活を両立させるため、1903年に建てられた。

湖畔の自然の中に建てられたこの建物は人ごみから離れ、彼らのコミュニティーを強めるユートピアの実現のためのようにも見える。一種の閉鎖性を感じてしまうのは、ステンドグラスにも現されていた彼らの密な人間関係ドラマを聞いたからでしょうか？

ここは、中庭を囲って3つの建物が配置され
湖側に赤い屋根に鱗壁のサーリネンのアトリエ兼住居、その北側の棟続きのリンドグレンの住居、向い側にあるログ風のガゼッリウスの住居とそれぞれ個性的な特徴を現して建っている。このコミュニティー内の立地条件から考えてサーリネンがこのコミュニティーの提案者かリーダー的存在で、あるいはその両方だったかを示しているようであり興味深い。サーリネンはこのコミュニティーが三人の終の棲家と考えていたかどうかは分からない事だがサーリネンの先妻を妻に迎えたガゼッリウスは3年後に亡くなり、リンドグレンは2年後に工業学校の校長を引き受けてここを去ってしまい、建物は全てサーリネンの所有となった

現在博物館になっているサーリネンの建物内部を見ることが出来た。ゴシックを思わせるリブにイスラム建築を思わせるような装飾ペイント迷路のようなプランで昔の古城の部屋にいる気分になった。
外に開放的、とは言えずむしろ内に閉ざした劇場空間のようでその中で、気の合う仲間を招いて共に時間を過ごしたであろうと想像できた。

本人のデザインした室内装飾、彼の奥さんがデザインした家具、どれもがきらめくような装飾で、まるで「無」の空間を意図的に埋め尽くすように置かれている・・
彼の建築はナショナルロマンチズム（民族ロマン主義）のスタイルと言われている。私には、風土の意匠と言うより、サーリネン自らの精神的な要素、潜在意識に眠るものを反映しているように見えた。
ヴィトレスクという建築のあり方のコンセプト。これら建築の装飾デザイン・・サーリネンは寂しがり屋のロマンチストだったのではないだろうか。そんな風に私は捕らえてしまった。
サーリネンのユートピアは現代の人々にとって憩いの場となって親しまれている。フィンランド人の心を捉える森と湖の生活、その理想郷を見せてくれているのかもしれない。



※視察ツアー参加メンバーの小野綾子さんが文を担当してくれました